La vie du Sénégal

Spécial.1

相模原市民海外レポーター　青木郁弥

セネガル　派遣期間　令和元年7月～令和3年7月

初めまして。NGO法人JICA(国際協力機構)、JOCVとしての要請のもとセネガルサッカー協会に所属している青木郁弥(あおきふみや)と申します。セネガルには令和元年の7月から首都のダカールを拠点に暮らしています。ダカールは西アフリカの経済拠点ということもあり非常に栄えています。

　前職は神奈川県立高等学校で保健体育科の教諭として働いていましたが、人生1度きりという思いの中で、サッカーの指導者としてもっと成長したい、アフリカという地を1度自分の目で見てみたい、より厳しい環境に身を置いてチャレンジしたいという気持ちが強く、再び海を渡りました。
現在はセネガルサッカー協会に所属し、主に女子ナショナルチーム（A代表）のコーチとしてアフリカ選手権優勝を目指して日々活動しています。

経歴

神奈川県相模原市出身
日体大サッカー部を卒業後、地元クラブが設立したISC相模原、松江シティFC（現JFL）をはじめ、北欧ラトビアリーグでもプレー。

~セネガルのサッカー事情とレベル~

【FIFA ランキング】

	日本代表	セネガル代表	
男子	２８位	２０位	（2020年４月９日現在）
女子	１１位	８７位	（2020年３月27日現在）

セネガル国内のスポーツといえばサッカー。一択です。ほとんどの男の子はボールを家の前や道端で蹴りながら大きくなる、と言っても過言ではありません。
しかし、「サッカーは男子がやるスポーツ」という風潮は日本よりも”ずっと”セネガルには文化として染みついています。
男子セネガルサッカー代表は日韓ワールドカップ2002年大会でワールドカップ初出場を果たしました。さらに植民地であったフランスを倒してベスト8に進出。

現在ではアフリカ大陸No. 1の座に上り詰めました。そのモデルケースをもとに、向こう15年でセネガルの女子サッカーもアフリカで、”世界”で、トップクラスまで成長させようという想いのもと本格的な強化がスタートしました。

と、ここで

Différence de culture

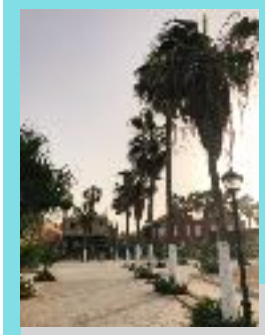
～文化の違い～

・公用語はフランス語🇫🇷

→母国語はウォロフ語です。英語を話せる人口の割合は少ないですが、首都では通じる人もいます。西アフリカの経済発展中心国でもあり、首都は多くの外国人で溢れかえっています。また、セネガルはリゾート地としても人気です。

・1日5回のお祈り。街はモスクで一杯です。

→セネガル人の90%以上はイスラム教



・チェブジェン

→セネガル伝統料理！

一皿日本円で約100円～1500円

高級な味合いから家庭の味まで、食べるお店や屋台で味付けが異なり実際にお気に入りのお店を見つけるのも楽しみの一つかも知れません。

・アタヤ　※とにかくあまーい！！

→選手にはなかなかお勧めできませんがセネガル伝統のティー。大量の砂糖が入っています。お昼休みにみんなでアタヤを飲みながら語り合います。イスラム教が大多数を占めるので、セネガル人はお酒を飲みません。（売ってはいます）

“活動内容“

セネガルサッカー協会に所属して、主に女子部門を担当しています。代表活動とともに国内リーグの活性化、海外リーグへ移籍する為の選手のレベルアップ、競技者人口増加を目指した活動を行っています。ナショナルチームと地域クラブの環境の差はかなりあり、セネガルのサッカー全体を底上げる為には育成年代への環境・指導の質の向上や指導者のレベルアップを重点的に改善していかなければなりません。

一時帰国中の”今”

充実したサッカー環境と素晴らしいスタッフに囲まれ本当に充実した日々を送っていました。言葉の壁やサッカースタイルの違い、アジア人に対するサッカーレベルの偏見。決して日本では味合うことのできない挫折も経験しました。しかし、選手たちは私が伝えたことも含めて柔軟に吸収し、日に日に成長していくのが分かりました。結果として直近の西アフリカ大会（UFOA CUP）で初優勝し、アフリカの女子サッカー史に名を残しました。4月から始まるアフリカ選手権に向けてより一層力を注いで活動していた矢先、新型コロナウイルスの影響で帰国せざるを得ない状況になり、現在は退避しているところであります。

スポーツは国を超える

それを改めて実感したチャレンジでもあります。コロナウイルスの為、アフリカでは当分プレーすることは難しいと思います。
そして私は、スポーツは必ずしも生活に必要ではないけれど、この世から不毛な争いを無くし、平和にする力があると、サッカーを通じて、セネガルでの生活を通じて再認識することができました。

”You never try. You never know.”

苦しいとき、辛いとき、ただでさえマイノリティな状況での生活でしたが、この言葉を自分に言い聞かせ１歩ずつ前に歩いてきたつもりです。
今は辛く悲しい日々が続いていますが1日でも早く、世界にあの頃の”日常”が戻ることを信じて。